The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A Theory of A-chain Formation and Multiple Theta-Role Assignment
Author(s)	石川, 弓子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54332
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【9】

氏　　名	石（いし）　川（かわ）　弓（ゆみ）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２３２９４　号
学位授与年月日	平成21年６月30日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	A Theory of A-chain Formation and Multiple Theta-Role Assignment （A連鎖形成と多重意味役割付与の一理論）
論文審査委員	（主査） 教　授　由本　陽子 （副査） 教　授　上田　　功　　准教授　宮本　陽一

論文内容の要旨

本論は、移動操作は何によって引き起こされるのかを明らかにすることを目的とし、Chomsky (2007, 2008)が提唱する最新の生成文法理論に従って、移動現象のうち特にA移動（A連鎖形成）の過程と、A移動と意味役割の付与との関係について考察する。

Chomsky (2008)は、移動は意味の二重性を統語的に具現化するという意味解釈部門からの要求を満たすための操作であると仮定し、統語部門から意味解釈部門への出力操作と移動を関連付け、出力操作の対象であるフェイズの主要部、つまり*v**とCのみが移動を引き起こすと主張している。更に、時制要素Tは単独で主語の移動を引き起こすのではなく、フェイズの主要部であるCから素性を引き継ぐことによって移動を引き起こす能力を得ると提案し、素性の引継ぎはフェイズ主要部の要請によって起こるため、フェイズの主要部と選択関係にある主要部間でなくてはならず、具体的にはCからT, *v**からVに限られると主張している。

本論はChomskyのフェイズの主要部のみが移動を引き起こし、他の主要部はフェイズの主要部から素性を引き継ぐことによってのみ移動を引き起こすことが可能であるという主張を支持するが、素性の引継ぎはフェイズの主要部の要請によって起こるというChomskyの主張に反し、素性を引き継ぐ主要部側にフェイズの主要部の情報を得る必要があるために起こると主張する。具体的には、フェイズの主要部のみが時制や空間と事象を関連付ける能力を備えており、他の主要部はこの能力を欠いているため、時制や空間に関する情報を得るためにフェイズの主要部から時制素性の値を得る必要があり、この要請が素性の引継ぎという操作によって満たされると提案する。この提案は、時制素性の値が定まっていない全ての主要部がフェイズ主要部からの素性の引継ぎを受けることを含意し、素性の引継ぎを受ける対象を拡大するため、様々な言語現象に対する統一的な説明が可能になる。

その1つとして、(1)に否定辞がeveryよりも広い作用域をとり、かつevery childがhisを束縛する解釈があるという事実が挙げられる。Chomskyの主張に従うと、A移動はTP指定部と他動詞文のVP指定部しか経由しないと予測されるため、(1)の派生は(2a)のようになり、この事実を説明することは困難である。一方、本論の提案に従うと、繰り上げ構文の主語は*v*PやVPの指定部を経由して移動することになるため、否定辞が*v*P指定部にあるevery childのコピーをc統御し、かつこのコピーがhisをc統御しているため、そのような解釈が得られることを容易に説明することが出来る。

(1)　Every child$_1$ doesn't seem to his$_1$ father to be smart.　(Sauerland 2003：310)

(2)　a.　Every child doesn't seem to his$_1$ father [$_{TP}$ (every child) to be smart]

b. Every child doesn't [$_{vP}$ (every child) [$_{vP}$ seem to his$_1$ father [$_{TP}$ (every child) to be smart]]]

また、(3a)にはsome, seem, againの作用域について、(i) again>some>seem, (ii) some > again > seem, (iii) some > seem >againのような曖昧性があるが、Chomskyの主張に従うと、(3b)のように主語がAP指定部から直接TP指定部へ移動するため、この事実を説明することは出来ない。

(3) a. Some student seems sick again.

b. [$_{TP}$ some student T [$_{vP}$ seem-v [$_{VP}$ (seem) [$_{AP}$ (some student) sick]]

c. [$_{TP}$ some student T [$_{vP}$ some student seem-v [$_{VP}$ (some student) (seem) [$_{AP}$ (some student) sick]]]]

一方、本論の提案に従うと、(3c)のように主語はVP指定部、vP指定部を経由して移動するため、againがvP指定部へ付加すると(i)、VPに付加すると(ii)、againがAPに付加すると(iii)の解釈が得られることになる。

(2)、(3)で見たように、本論の提案に従うと、限定詞句はこれまで考えられていたよりも多くのA位置を経由して移動することになるため、その過程で意味役割の付与が行われるθ位置を経由する可能性が生じる。実際に、(4b)、(5b)の非文法性は、主節の動詞とECM主語の間に選択関係があることを示しており、言い換えると、(4a)のECM主語は不定詞節の内部だけではなく、主節のVP指定部へ移動した際に動詞から意味役割を与えられていることを示す。

(4) a. Sue estimated Bill's weight to be 150 lbs.

b. *Sue estimated Bill to weigh 150 lbs.

(5) a. Sue estimated Bill's weight.

b. *Sue estimated Bill. (Bošković 1997: 96)

この観察から、本論ではフェイズの主要部が引き起こすA移動の経由地にθ位置が含まれている場合に限り、1つの限定詞句が複数の意味役割が得ることが可能であると提案する。

この提案に従うと、(6)の義務的コントロール構文や、(7)の結果構文のように、項のうちの1つが複数の意味役割を与えられていると解釈される構文がどのように生成されるのかを統一的に説明することが可能である。

(6) Bill persuaded John to leave.

(7) John hammered the metal flat.

これまで、これらの構文は一方のθ位置にPROがあると考えられてきたが、Chomsky and Lasnik (1993)のPROは非定形の時制要素に空格を付与されるという主張に従うと、特に結果構文の場合は非定形の時制要素が無いため、PROがどのように認可されるのかを説明することが出来ない。また、Chomsky and Lasnikの主張は、PROの分布を説明するためだけに定義されたものに過ぎないこと、PROがwanna縮約を妨げないことなどをHornstein (1999)は問題点として挙げている。一方、本論の提案に従うと、(6)、(7)の派生は以下のようになり、どちらもがv*からVへ引き継がれた素性によってVP指定部へ移動し、意味役割をVから付与されるため、移動した要素は元位置で付与された意味役割と両方の意味役割を得ることになる。

(8) a. Bill persuaded-v* [$_{VP}$ John V [$_{CP}$ C [$_{TP}$ to [$_{vP}$ (John) leave]]]]

b. John hammered-v* [$_{VP}$ the metal V [$_{AP}$ (the metal) flat]]

ここで重要なのは、あくまでも移動を引き起こすのはフェイズ主要部から引き継がれた素性であり、Hornstein (1999)やSaito (2001)が主張するように、非フェイズ主要部であるVの意味役割素性がA移動を引き起こすのではないという点である。

これまで非フェイズ主要部の要求が一致によって満たされることにより、フェイズではない投射の指定部へのA移動が引き起こされる例について論じたが、非フェイズ主要部の要求はフェイズ主要部との一致によってのみではなく、フェイズ主要部の位置まで移動して付加すること、つまり主要部移動によっても満たすことが可能であると提案し、A移動と主要部移動の統一的な動機付けを試みる。更に、Fox and Pesetsky (2004)にどの主要部がフェイズ主要部として機能するかが言語間で異なるという主張に従うことにより、フランス語では動詞がTまで移動するが、英語では移動しないことなどの、言語間の違いを捉えられることを示す。また、日本語の軽動詞構文、中国語の結果構文が主要部移動によって生成され、その過程で局所的な限定しくに意味役割が付与されることから、主要部移動は非顕在的に起こる操作であるというChomsky (2001)の主張に反し、主要部移動は顕在的に起こる操作であると主張する。

以上のように、本論はフェイズの主要部しか移動を引き起こすことは出来ないというChomskyの主張に従い、非フェイズ主要部が移動を引き起こしているかのように思われる現象は、全て非フェイズ主要部がフェイズ主要部から素性を引継ぐために生じると提案し、この提案によって様々な言語現象を統一的に説明出来ることを示した。素性の引継ぎはフェイズ主要部の要請によって起こる操作であるというChomskyの主張に反し、非フェイズ主要部に欠けた情報を補うための操作であると主張したが、あくまでも非フェイズ主要部はフェイズ主要部と一致することによって始めて移動を引き起こす能力を得るのであり、非主要部自らに移動を引き起こす能力が備わっているわけではないという点は同じである。この修正によって、より多くの現象を統一的に捉えられるため、本論の分析はフェイズの主要部しか移動を引き起こすことは出来ないというChomskyの主張を強く支持するものである。また、言語間の違いについて新たな研究法を示したことにより、今後の言語研究の発展に寄与し得るものと考える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、生成文法の根幹的な問題の一つである「移動」が引き起こされるメカニズムに関して、最新のミニマリズム・プログラムの枠組みで、項位置への移動（A移動）に関する諸仮説を検討し、それらの問題点を解決する新たな分析を提示するものである。フェイズの主要部のみならず、非フェイズ主要部もフェイズ主要部から素性を引き継ぐことにより移動を引き起こし得るという仮定に基づき、受動文や非対格構文のみならずコントロール構文や結果構文に関してもA移動による統一的な説明を可能にした点が、本論文の最大の貢献であるといえる。

1章では、最新の統語論においてA移動に関するどのような問題があるかを明らかにし、特に移動の引き金となる素性がどのような範疇間で、またどのような原因で引き継がれるのかという問題提起をしている。2章では、フェイズ主要部ではなく、素性を引き継ぐ側に引き継ぎの要因があるという新たな主張がなされ、この仮説のもとに、非対格の自動詞文と受身文について新たな分析が示されている。これらの動詞句の主要部はCから素性を引き継いでおり、従来の分析とは異なり、主語位置への移動はSpec vPとSpec VPとを経由すると仮定することにより先行研究で解決されていなかった再構築の問題に合理的な説明を与えている。 3章では、2章で提案された仮説によって、従来PROの存在により説明されていた一つの名詞句に二つのθ役割が付与されているような構文が、PROを仮定することなく分析できることを示している。すなわち、名詞句がフェイズの主要部から引き継がれた素性をもつ非フェイズの主要部の指定部に移動することにより複数のθ付与を受けることが有り得るという主張である。3章で提案した分析をもとに、4章では、結果構文に焦点を当て、他動詞結果構文と非能格動詞の結果構文の違い、また、後者については、言語間の差異に関して、原理的な説明を試みている。さらに5章では、義務的コントロール構文を取り上げ、3章で提案したA移動による分析の妥当性についてさらに詳しく論じ、不定詞句の主語は、v*からVへ引き継がれた素性によってVP指定部を経てA移動し格を付与されるために、もとの位置とVP指定部とにおいて複数のθ役割を得るのだと主張している。時制文の補部と不定詞句補部との間にある長距離抜き出しにおける差異は、コントロール構文の補部CPがフェイズではないことに帰されるものとし、さらにアイスランド語などにおける不定詞句内での一致現象をもとに主要部Cにはϕ素性はあるが人称の素性が欠けていることを主張している。 6章では、本論の全体を通じて重要な役割を果たしているフェイズとは何か、また素性の引き継ぎがなぜ起こるかという問題を考察し、フェイズの主要部には時空間に関する情報があり、非フェイズの主要部にはそれが欠けていることが素性の引継ぎを引き起こすと主張している。

以上のように、本論文はミニマリスト・プログラムの枠組みにおいて、自然言語の重要な特徴である移動現象の中で、特にA移動に関して新たな知見を与えるものであり、その理論的な貢献は大きく、高く評価できる。ただ、課題もいくつか残されている。まず、フェイズと非フェイズの区別は時空間に関する情報の有無にあるという主張については、vならびにDに関して、十分に説得力のある議論が展開されているとは言い難い。また本論の提案が、言語間の差異をいかに説明するかについても、今後更に考察を深める必要がある。しかしながら本論文が示したA移動に関する提案は、A移動とA′移動の派生過程を比較することにより、移動現象全般の理論発展に更なる貢献が十分期待されるものと考えられ、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。